



祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報

天満アんまん

令和四壬寅年
新春号外
年首御慶

新
春
号
外

至誠

宮司 挿毫

- 初詣の新型コロナウイルス感染防止対策について**
- ① 正月三ヶ日を避け二月節分ごろの方は検温させて頂きます。
 - ② までの分散参拝をお願いします。
 - ③ マスクを着用し、境内各所の消毒液で手洗いをお願いします。
 - ④ 体調のすぐれない方、三七・五度以上の熱のある方は、ご参拝をお控えください。
 - ⑤ ご祈祷等で本殿他の施設にお入発信します。
 - ⑥ SNSで境内の混雑状況を随時

菅公の御神徳

大阪天満宮

宮司 寺井 種治

当宮のご祭神である菅原道真公は、現在では「学問の神」として広く世に知られています。これはご承知の

よう、道真公は学者の家に生まれて学問に秀で、わずか五歳の時に「美しい紅の色なる梅の花あこが頬にもつけたくぞある」という歌を詠みました。周りの大娘達を驚かせたという話や、史上最年少で文章生となり、文章博士、後には右大臣にまで昇進した事でも分かります。

優秀な学者であり、優れた政治家でもありました。しかも天才であると同時に大変な努力家であつたと伝えられています。

そしてお亡くなりになつた後、天神様として多くの人々から崇敬されるようになつたのは、単に学問に秀んでいたからという理由だけではなくそのお人柄も素晴らしいからだと言われています。

それが表しているのが、道真公が「至誠の神」としても崇められていました。大変残念で今年こそは神事を中心とし、渡御行事は中止となりました。何としても渡御を行いたいという思いがあります。天神様が示された「至誠」の精神で、今年の天神祭はじめ諸祭儀に誠実に取り組んで参りたいと思います。

された後も、天皇を敬慕する心に変わりはなく、それは詠まれた「秋思」の詩などに表れています。

一昨年からのコロナ禍にあって私たちの日常は一変してしまいました。

んな日々が続きました。そのような中で家族や友人などを思う心は、より一層深まつた事だと思います。

誠実で清らかな心というものは必ず通じるものです。眞面目に思いを進め、どうすれば為し得るのかを考え、行動すれば道は開けるはずです。

道真公の示された「和魂漢才」の精神も何事にも「至誠」の心で取り組んだからこそ、現在に語り継がれるようになつたのだと思います。

当宮の天神祭も、一昨年・昨年と何としても渡御を行いたいという思いがあります。天神様が示された「至誠」の精神で、今年の天神祭はじめ諸祭儀に誠実に取り組んで参りたいと思います。

今年の干支 壬寅（みずのえ・とら）

昨年は「辛丑かのと・うし」の年でした。「辛」は、これまで地下深く潜んでいたエネルギーが地上に発現することを意味し、「丑」は「紐」と同義で、種々の動きを結び合わせ、新たな動きを始めるなどを示していました。

新型コロナウイルス感染症の拡大により厳しい対応を迫られた昨年ですが、これまでに蓄えたエネルギーによって、新たな生き方を模索すべきことを求められた年だったといえましょう。さて、今年は「壬寅（みずのえ・とら）」の年です。「壬」は、「任」や「妊」に通じる字義を持ちます。「任」は「責任を担う」、あるいは「任務を受ける」という意味を持つ「妊」は「物を孕（はらむ）」ことに通じます。そして、「寅」は、人が手を合わせて約束することを示す象形文字で、「畏れ慎む」とともに「進む・動く」という語義を持ち合わせています。

責任を果たすべきことを示しているのです。まだまだ予断を許さないコロナ禍ですが、このような困難な時代だからこそ、いま一度、自身の任務や立場を見つめ直し、注意深く行動する年にしたいのです。

（安岡正篤大人の著書より）

令和四年元旦 大阪天満宮



ですから、「壬寅」の今年は、畏れ慎みながらも、自らの任務を自覚し、

人形でたどる 天神様の一代記

「菅家廊下」

当宮の境内西方にある「菅家廊下」をご存知でしょうか。天神様・菅原道真公（八四五～九〇三）の御生涯を、博多人形五十一体・十五場面で再現したギャラリーです。

人形は、博多人形師の最高峰と称された小島与一氏（一八八六～一九七〇）の作品で、昭和三十年に太宰府天満宮から当宮に寄贈され、その後、昭和六十二年（一九八七）の梅香学院の改築に伴い、展示ギャラリーを設けて公開されました。このたび、その解説板をより詳しく書き換えるとともに、英語・中国語・韓国語の訳文も添えて、一新いたしました。

◆ 「菅家廊下」と「登龍門」

また、「山蔭亭」は「登龍門」とも称されました。中国・黄河の中ほどにあつた急流は、ここを登り切った「鯉」は、「龍」に変身するという伝説により「登龍門」と呼ばれていました。このことから、立身出世の関門を「登龍門」とも呼ぶようになりました、「山蔭亭」も官吏登用試験に多数の合格者を出したことから「登龍門」と俗称されたのです。

当宮の本殿と拝殿の間に位置する幣殿の東門・西門を「登龍門」と呼ぶのは、この中国の故事を踏まえるとともに、「山蔭亭」の俗称に響かせていているのです。

◆ 菅家廊下の十五場面

さて、「菅家廊下」は、十五場面で構成されています。以下に各場面の簡単な説明を記しておきますが、ぜひとも付けたのは、平安時代の菅原家に設けられていた私塾の名を借用したもので、正式名称は「山蔭亭」でしたが、その評判が高くなるに伴つて塾生が増加したため、廊下にま

であふれ出して勉学にいそしんだことから「菅家廊下」とも呼ばれたのです。

◆ 解説文リユース

①初めての漢詩 菅公（菅原道真公

の尊称)は、十一歳の時に、漢詩人・島田忠臣の指導を受けて「月夜見梅花」という漢詩を詠まれました。

②母君の願い 菅公の母君は、幼少の菅公が病弱だったことを心配され、日夜、観音堂に日参して、その健康を祈願されたと伝えられます。



⑤讃岐守としての善政 菅公は、讃岐守(讃岐国司の長官)として讃岐(香川県)に赴任され、四年間にわたって善政を施されました。

⑥城山で降雨祈願 菅公の讃岐赴任中に旱魃が起り、農民たちを苦しめた際、菅公は城山(香川県坂出市)に登り降雨祈願を行われました。



⑦手向山八幡宮の参拝 菅公は、宇多上皇に御供した際、手向山八幡宮(奈良市)に参拝、のち『百人一首』に収録される歌を詠まれました。

⑧「秋思」の詩篇 菅公は御所・清涼殿での宴で、勅題「秋思」について作詩され、醍醐天皇から、御の鳴き声に促されて出立されました。

⑨紅梅殿の別れ 菅公は右大臣を解かれ、大宰權帥に左遷されることになり、「東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花」の歌を詠みました。

⑩道明寺の別れ 菅公は左遷の途次に、道明寺(藤井寺市)のおば・覚寿尼様を訪ねましたが、一番鶏の鳴き声に促されて出立されました。

⑪大将軍社に参拝 道明寺から難波の碕に戻られた菅公は、同地の大將軍社に参拝されました。のち、この地に当宮が建立されます。

⑫恩賜の御衣 太宰府での菅公は謹慎の日を過ごされ、前年に醍醐天皇から賜った御衣を捧げて、京の生活を思い浮かべられました。

⑬太宰府天満宮 菅公が太宰府で薨去されると(享年五十九)、その墓所に祀廟が創建され、やがて、現在の太宰府天満宮に発展します。

⑭大宰府の政庁 大宰府の政庁は、九州地方の管轄と、防衛・外交を司りましたが、菅公はその政務に預かることはありませんでした。

⑮天神祭 かつて菅公が参拝された大将軍社の地には、のちに当宮が建立され、その夏大祭「天神祭」は日本三大祭の一に発展します。

開催日程	
一月十四日(金)	午後三時～四時
十五日(土)	三時～四時
十六日(日)	三時～四時
二十四日(月)	二時～三時
二十五日(火)	一時～三時
二十九日(土)	二時～三時
二月六日(日)	三時～四時
二十日(日)	三時半～四時半

(注)状況により変更させて頂くことがあります。ご諒承ください。

● 今年の登龍門「通り抜け神事」

毎年一月～三月の定まった日だけ、

受験生を対象として、「登龍門」の

東門から西門へ通り抜けていたく

「通り抜け神事」を行っており、本

年は九回の開催を予定しています。

これも、かつての「山蔭亭」の塾生たちが官吏登用試験に合格したこと

があやかつていただきたいとの思い

があります。

なお、今年の「通り抜け神事」は新型コロナ感染防止のため、待機列では間隔をとつていただき、本殿内への参入人数を制限させていただきますのでご理解と協力をお願い申し上げます。

